

## 6.1 検出力の概要

本来は差があるときに、有意差ありと判定する確率を検出力という。検出力は計算により求めることができる。

### 6.1.1 検出力の考え方

#### 検定における判断の誤り

帰無仮説  $H_0$  が本当は真であるときに、 $H_0$  を棄却する誤りを第1種の過誤という。その確率は有意水準  $\alpha$  となる。一方、帰無仮説  $H_0$  が本当は真でないときに、 $H_0$  を棄却しない誤りを第2種の過誤という。その確率は  $\beta$  という記号で表される。

検定における2つの誤り

		検定の結果	
		$H_0$	$H_1$
本当の状態	$H_0$	○	第1種の過誤
	$H_1$	第2種の過誤	○

※○は検定で正しい判断を下していることになる。

検定では、有意水準  $\alpha$  を0.05という小さな値に設定している。このことは、第1種の過誤を犯す確率  $\alpha$  を0.05という小さな値に設定していることになる。一方で、 $\beta$  の値は不明である。

#### 検出力とは

検出力とは、母集団に差があるときに、正しく有意である（差がある）と判定する確率のことで、 $1 - \beta$  と表現される。 $\beta$  は検定における第2種の誤りを犯す確率を意味し、本来は母集団に差があるにもかかわらず、有意と判定しない確率を意味している。 $\beta$  および  $1 - \beta$  の計算は、検定の有意水準、検出した差、標本サイズ  $n$  によって、変化し、これらの値から計算される。

## 6.1.2 検出力の計算

### 母平均に関する検定と検出力

母平均に関する検定 ( $H_0: \mu = \mu_0$ ) を例に解説していくことにしよう。  
ここでは、次のような検定を考えることにする。

$$H_0: \mu = 50$$

$$H_1: \mu > 50$$

$n = 25$  とする。また、既知の母標準偏差  $\sigma$  の値を 25 とする。  
この検定の統計量  $Z_0$  は、平均値を  $\bar{x}$  とすると、次のように計算される。

$$Z_0 = \frac{\bar{x} - 50}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} = \frac{\bar{x} - 50}{\frac{25}{\sqrt{25}}} = \frac{\bar{x} - 50}{5}$$

また、棄却域 ( $H_0$  を棄却する領域) は片側検定であるから、次のように設定される。

$$Z_0 \geq 1.645$$

したがって、

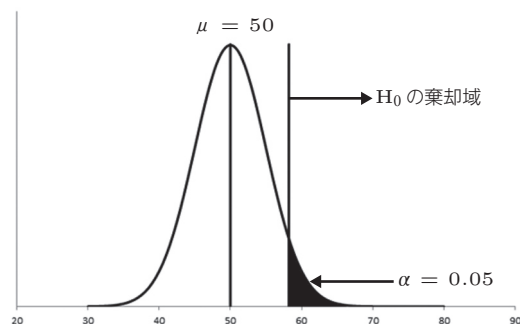
$$\frac{\bar{x} - 50}{5} \geq 1.645$$

のときに有意となる。 $\bar{x}$  について書き直すと、次のようになる。

$$\bar{x} \geq 50 + 1.645 \times 5$$

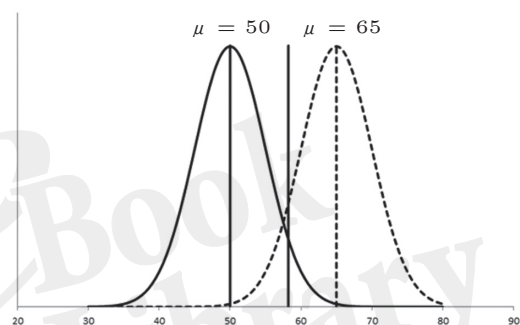
$$\bar{x} \geq 58.225$$

このことを次の図で表すことにしよう。



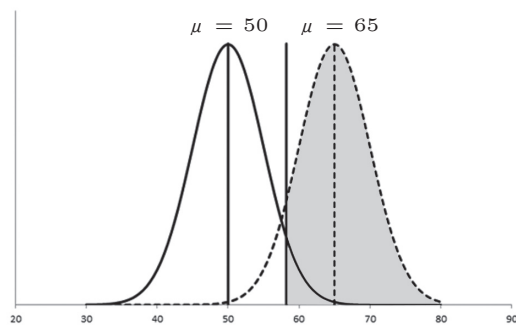
$H_0$  のとき ( $\mu = 50$ ) の  $\bar{x}$  の分布

次に、対立仮説が真であるときの  $\bar{x}$  の分布を示すことにしよう。ここでは、真の  $\mu$  の値を 65 とする。母標準偏差は同じく  $\sigma = 25$  としておく。



$H_1$  のとき ( $\mu = 65$ ) の  $\bar{x}$  の分布

$\mu = 65$  であるときに、 $H_0: \mu = 50$  が棄却される確率は、次の図の灰色の領域となる。



$H_0: \mu = 50$ が棄却される確率

この確率は、Rでは次のように求めることができる。

```
> x <- 58.225
> n <- 25
> sig <- 25
> sigxbar <- sig/sqrt(n)
> pp <- pnorm(x, mean=65, sd=sigxbar, lower.tail=TRUE)
> power <- 1-pp
> power
[1] 0.9122912
```

0.9122912 (91.2%) という値が、このときの検出力となる。

検出したい差が大きくなるほど、 $n$ が大きくなるほど、 $\sigma$ が小さくなるほど、検出力は高くなる。

## 6.2 検出力の実際

### 6.2.1 母平均に関する検定

Rには $t$ 検定における検出力を求めるための関数`power.t.test()`が用意されているので、その使い方を紹介していくことにする。

#### 例題1： $t$ 検定の検出力

$\sigma$ 未知の母平均に関する検定を想定する。帰無仮説 $H_0$ 、対立仮説 $H_1$ 、有意水準 $\alpha$ は、次のとおりである。

$$H_0: \mu = 50$$

$$H_1: \mu > 50$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を10、標本サイズ $n$ を30とするときの検出力を求める。母標準偏差は未知であるが、ここでは20と仮定する。

#### Rの関数

```
> power.t.test(n=30, delta=10, sd=20, sig.level=0.05, type="one.sample",
+ alternative="one.sided")
```

#### Rの結果

```
One-sample t test power calculation

      n = 30
  delta = 10
     sa = 20
sig.level = 0.05
   power = 0.8482542
alternative = one.sided
```

検出力は0.8482542と求められている。

## 例題2： $t$ 検定の例数

例題1と同様に、 $\sigma$ 未知の母平均に関する検定を想定する。帰無仮説  $H_0$ 、対立仮説  $H_1$ 、有意水準  $\alpha$  は次のとおりである。

$$H_0: \mu = 50$$

$$H_1: \mu > 50$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を10、検出力を0.9としたいとき、標本サイズ  $n$  をいくつにしなければいけないか求める。ただし、母標準偏差を20と仮定する。

## Rの関数

```
> power.t.test(delta=10, sd=20, sig.level=0.05, power=0.9, type="one.sample",
+ alternative="one.sided")
```

## Rの結果

```
One-sample t test power calculation

      n = 35.65268
  delta = 10
    sa = 20
sig.level = 0.05
  power = 0.9
alternative = one.sided
```

$n = 35.65268$ と求められている。したがって、必要なデータの数36以上ということになる。

例題1と例題2で見てきたように、Rの関数 `power.t.test()` を使うことで、以下を求めることが可能となる。

- ① 検出したい差と標本サイズ  $n$  から 検出力  $1 - \beta$
- ② 検出したい差と検出力  $1 - \beta$  から 標本サイズ  $n$

## 6.2.2 2つの母平均の差に関する検定

### 例題3：t検定（対応なし）の検出力

2つの母平均の差に関する検定を想定する。帰無仮説  $H_0$ 、対立仮説  $H_1$ 、有意水準  $\alpha$  は次のとおりである。

$$H_0: \mu_A = \mu_B$$

$$H_1: \mu_A \neq \mu_B$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を10、標本サイズ  $n_A = n_B = 20$  とするとき、検出力を求める。ただし、母標準偏差を  $\sigma_A = \sigma_B = 15$  と仮定する。

### Rの関数

```
> power.t.test(n=20, delta=10, sd=15, sig.level=0.05, type="two.sample",
+ alternative="two.sided")
```

### Rの結果

Two-sample t test power calculation

```
      n = 20
    delta = 10
      sd = 15
sig.level = 0.05
  power = 0.5377573
alternative = two.sided
```

NOTE: n is number in \*each\* group

検出力は0.5377573と求められている。

### 例題4：t検定（対応なし）の例数

例題3と同様に、2つの母平均の差に関する検定を想定する。帰無仮説  $H_0$ 、

対立仮説  $H_1$ 、有意水準  $\alpha$  は次のとおりである。

$$H_0: \mu_A = \mu_B$$

$$H_1: \mu_A \neq \mu_B$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を 10、検出力 0.9 としたいとき、標本サイズ  $n$  をいくつにしなければならないかを求める。ただし、母標準偏差を  $\sigma_A = \sigma_B = 15$  と仮定する。

## R の関数

```
> power.t.test(delta=10, sd=15, sig.level=0.05, power=0.9, type="two.sample",
+ alternative="two.sided")
```

## R の結果

```
Two-sample t test power calculation

      n = 48.26431
    delta = 10
      sd = 15
sig.level = 0.05
  power = 0.9
alternative = two.sided

NOTE: n is number in *each* group
```

標本サイズ  $n = 48.26431$  と求められている。したがって、必要なデータの数は各グループ 49 以上となる。

ちなみに、標本サイズ  $n_A = n_B = 48$  として検出力を計算すると、次のようになる。

```
> power.t.test(n=48, delta=10, sd=15, sig.level=0.05, type="two.sample",
+ alternative="two.sided")

Two-sample t test power calculation
```



```

n = 48
delta = 10
sd = 15
sig.level = 0.05
power = 0.8983981
alternative = two.sided

```

NOTE: n is number in \*each\* group

検出力は0.8983981となり、0.9を超えていない。

一方、標本サイズ  $n_A = n_B = 49$  として検出力を計算すると、次のようになる。

```

> power.t.test(n=49, delta=10, sd=15, sig.level=0.05, type="two.sample",
+ alternative="two.sided")

```

Two-sample t test power calculation

```

n = 49
delta = 10
sd = 15
sig.level = 0.05
power = 0.9043394
alternative = two.sided

```

NOTE: n is number in \*each\* group

検出力は0.9043394となり、0.9を確保できていることがわかる。

### 6.2.3 対応のある2つの母平均の差に関する検定

#### 例題5：t検定（対応あり）の検出力

対応のあるデータにおける2つの母平均の差に関する検定を想定する。帰無仮説  $H_0$ 、対立仮説  $H_1$ 、有意水準  $\alpha$  は次のとおりである。

$$H_0: \mu_A - \mu_B = 0$$

$$H_1: \mu_A - \mu_B \neq 0$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を10、標本サイズ  $n_A = n_B = 20$  とするとき、検出力を求める。  
ただし、差の標準偏差を  $\sigma_d = 15$  と仮定する。

## Rの関数

```
> power.t.test(n=20, delta=10, sd=15, sig.level=0.05, type="paired",
+ alternative="two.sided")
```

## Rの結果

```
Paired t test power calculation

      n = 20
    delta = 10
      sd = 15
sig.level = 0.05
   power = 0.8072909
alternative = two.sided

NOTE: n is number of *pairs*, sd is std.dev. of *differences* within pairs
```

検出力は0.8072909と求められている。

### 例題6：t検定(対応あり)の例数

例題5と同様に、対応のある2つの母平均の差に関する検定を想定する。帰無仮説  $H_0$ 、対立仮説  $H_1$ 、有意水準  $\alpha$  は次のとおりである。

$$H_0: \mu_A - \mu_B = 0$$

$$H_1: \mu_A - \mu_B \neq 0$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

検出したい差を10、検出力0.9としたいとき、標本サイズ  $n$  をいくつにしなければならないかを求める。ただし、差の標準偏差を  $\sigma_d = 15$  と仮定する。

## Rの関数

```
> power.t.test(delta=10, sd=15, sig.level=0.05, power=0.9, type="paired",
+ alternative="two.sided")
```

## Rの結果

Paired t test power calculation

```
      n = 25.6399
    delta = 10
      sd = 15
sig.level = 0.05
  power = 0.9
alternative = two.sided
```

NOTE: n is number of \*pairs\*, sd is std.dev. of \*differences\* within pairs

標本サイズ  $n = 25.6399$  と求められている。したがって、必要なデータの数は各グループ 26 以上となる。

### 6.2.4 一元配置分散分析

#### 例題7：一元配置分散分析の検出力

水準の数が4、各水準の繰り返し数  $n$  を3とする一元配置分散分析を想定したとき、群間変動が群内変動の2倍となった場合の検出力を求める。有意水準  $\alpha$  は0.05とする。

一元配置実験のデータ表

		A1	A2	A3	A4
繰 返 し	1				
	2				
	3				

## Rの関数

```
> power.anova.test(groups=4, n=3, between.var=2, within.var=1, sig.level=0.05)
```

分散分析における検出力を計算し、例数を求めるときには、関数`power.anova.test()`が有効である。この関数には引数として、「比較するグループの数」、「各グループの繰り返し数」、「群間分散」、「群内分散」、「有意水準」を指定する。

## Rの結果

Balanced one-way analysis of variance power calculation

```
groups = 4
n = 3
between.var = 2
within.var = 1
sig.level = 0.05
power = 0.8009998
```

NOTE: n is number in each group

検出力は0.8009998と求められている。

## 例題8：一元配置分散分析の例数

水準の数が3、各水準の繰り返し数を $n$ とする一元配置分散分析を想定したとき、群間変動が群内変動の2倍となった場合の検出力を0.9とするには、繰り返し数 $n$ をいくつにすればよいかを求める。有意水準 $\alpha$ は0.05とする。

## Rの関数

```
> power.anova.test(groups=3, between.var=2, within.var=1, sig.level=0.05,
+ power=0.9)
```

## Rの結果

Balanced one-way analysis of variance power calculation

```
groups = 3
n = 4.351617
```

```

between.var = 2
within.var = 1
sig.level = 0.05
power = 0.9

```

NOTE: n is number in each group

繰り返し数  $n = 4.351617$  と求められている。したがって、以下のように、各水準における繰り返し数は5以上とする一元配置実験を計画することになる。

一元配置実験のデータ表

		A1	A2	A3
繰り返し	1			
	2			
	3			
	4			
	5			

## 6.2.5 割合に関する検定

### 例題9：割合の差に関する検定の検出力

次のような2つのグループの割合の差に関する検定を想定する。

$$H_0: \pi_A = \pi_B$$

$$H_1: \pi_A \neq \pi_B$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

第1グループの母割合  $\pi_A$  が0.3、第2グループの母割合  $\pi_B$  が0.5、各グループの標本サイズ  $n_A = n_B = 50$  とするとき、検出力を求める。

### Rの関数

```
> power.prop.test(n=50, p1=0.3, p2=0.5, sig.level=0.05, alternative="two.sided")
```

2つの母集団における割合を検定するときの検出力を計算し、例数を求めるときには、関数 `power.prop.test()` を利用する。この関数には引数として、

「各グループの標本サイズ」、「第1グループの母割合」、「第2グループの母割合」  
「有意水準」、「片側検定か両側検定か」を指定する。

## Rの結果

```
Two-sample comparison of proportions power calculation

      n = 50
      p1 = 0.3
      p2 = 0.5
sig.level = 0.05
  power = 0.5330844
alternative = two.sided

NOTE: n is number in *each* group
```

検出力は0.5330844と求められている。

### 例題10：割合の差に関する検定の例数

例題9と同様に、次のような2つのグループの割合の差に関する検定を想定する。

$$H_0: \pi_A = \pi_B$$

$$H_1: \pi_A \neq \pi_B$$

$$\text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

第1グループの母割合  $\pi_A$  が0.3、第2グループの母割合  $\pi_B$  が0.5とすると、  
検出力を0.9とするには、各グループの標本サイズ  $n$  をいくつにすればよいか  
を求める。

## Rの関数

```
> power.prop.test(p1=0.3, p2=0.5, sig.level=0.05, power=0.9,
+ alternative="two.sided")
```

## Rの結果

```
Two-sample comparison of proportions power calculation
```

```
      n = 123.9986  
      p1 = 0.3  
      p2 = 0.5  
sig.level = 0.05  
  power = 0.9  
alternative = two.sided
```

```
NOTE: n is number in *each* group
```

$n = 123.9986$ と求められている。したがって、各グループから124ずつの例数が必要であることがわかる。